



Kansai University Center for Teaching and Learning
Newsletter

関西大学 教育開発支援センター
ニュースレター

March 2013

vol. 11

FD —10年の経験から思うこと—

教育推進部 副部長
社会学部 教授 関口 理久子



もう10年以上前になりますが、関西大学のファカルティ・ディベロップメント（FD）の一環として、「専門演習における学生の積極的な参加を促すための取り組み」のFDフォーラム（当時）において口頭発表とビデオ制作をしました。その頃はまだ教育推進部創設以前であり、私自身一教員としては手探り状態でFDに取りかかろうとしていた時期のことでした。その頃から10年以上が経ち、専門演習における取り組みは変化しながらも発展していったように思います。

当初、グループワークを取り入れることで授業への積極的な参加を促し、学習意欲とコミュニケーション力を高め、研究への興味を喚起し、各自の卒業研究テーマを見つけ、研究を完成させることを目標にしていました。これは、一見うまくいきそうに見えるのですが、学習への動機付けや表現力だけでは研究は成立しません。特に、実験心理学という私の研究領域は、実験計画を立て、デー

タを集め、データ分析を行い、仮説の検証を行うといった手法を用いるので、論理的な思考力が必要になります。この「論理的思考力を育てる」というのはなかなかやっかいな大きな壁として、ドーンと立ちはだかっているような気がします。しかし、壁も崩壊します。論理的思考力の育成を最近のFDのテーマとして日々格闘しています。

また、その頃始めた約20人規模の専門演習指導への取り組みの他にも、200人以上の大規模な講義科目、IT機器などを活用した実験実習科目、クラス（30人程度）単位の1年次の導入教育などでは、それぞれの形態に合わせた取り組みができるようになってきました。この頃では、専攻内の他の科目と連動することを意識しながら個々の授業運営をするとともに、他の教員の方々の協力やTAの活用など組織的にできることも取り込みつつあります。10年以上も経ち、やっとFDとはこういうことだったのか・・・とわかり始めたような気がしています。

凜風館1Fに

「コラボレーションコモンズ」を開設します！

ラーニング・コモンズ、ステューデント・コモンズ等、コモンズと称する施設が大学生の学びを支える学習環境として開設されています。その背景には、大学生に求められる新しい能力を育成したり、学力格差を縮めるために授業外に学生支援を実施したりするための学習環境を整備しようという大学の意図があります。PISA型能力(OECD2001)に代表される新しい能力は、高等教育分野では学士力(中央教育審議会2008)、社会人基礎力(経済産業省2006)、就職基礎力(厚生労働省2004)が挙げられ(松下2010)、このような新しい能力を培うことが現在の大学生に求められています。

このような力を育成するために、大学は何を提供すればよいのでしょうか。そのためにはいくつかの方法が考えられますが、そのひとつとしてアクティブ・ラーニングがあります。アクティブ・ラーニングでは、協同的な学習や、学生自らの思考を促す能動的な学習を行い、学習者が他者と協同し自律的に学ぶことを重視しています。自律的な学習は授業内にとどまらず、授業外においても学習者が継続して学習することを重視しています。そのため、授業外の学習環境をどう構築するべきなのかはアクティブ・ラーニングを実施する上で重要な要素になります。この要素として注目されているのがラーニング・コモンズです。

ラーニング・コモンズでは、学びの場の提供に加えて、ライティングなどの基礎的な学習を支える学習支援の機能を備え、学力に課題を抱える学生が授業外に自分で学ぶことやさらに学びを深めたい学生を支援しています。文部科学省も2012年8月28日の答申「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて～生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ～」において学修時間を増加するために、授業外学習を促進するための学習環境や、学習支援を構築することの重要性を指摘しています。以上のような背景から、関西大学においても授業外における学習者同士の協同、

自律的な学習を支えるためのコモンズを整備することになりました。

2012年度私立大学教育研究活性化設備整備事業において採択された取組として、関西大学は2013年4月に「コラボレーションコモンズ」を開設します。関西大学は、これまで連続採択されたライティング支援、アクティブ・ラーニングの促進、ピアコミュニティ活動、留学支援のGPに加え、ボランティア活動、教育研究を促進し、成果を上げてきました。これらの学内の教育活動を有機的に結合、実質化させた学習環境としてコラボレーションコモンズを整備することで、他者と協力し合いながら、考え、行動する「考動力」を培った人材を育成することを目指しています。

コラボレーションコモンズは、ライティング、グローバル、ボランティア、ピア、ICT、ラーニングエリアから構成される専門エリアに加え、コラボレーションエリアを設け、他者と共同した学習を支援します。

専門エリアでは、各専門性を活かした学びの生成と学習支援を行います。例えば、グローバルエリアでは、学生スタッフを導入し、留学生による外国語交流会、留学生とのTALKセッション、留学情報の提供、留学をした学生との交流会、留学生向け相談受付アワーを実施します。ライティングエリアでは、レポート作成に関するワンポイント講座やTAによるライティング支援をします。ボランティアエリアやピアエリアでは、ボランティア・ピアに関する情報の提供や活動に参加する学生への説明会を実施します。ICTエリアでは、グループでPCを囲んで作業ができます。ハードスペックのPCとiPadを備えており、動画、マルチメディアプレゼンテーションを制作できます。ラーニングエリアは、プロジェクター、モニター、ホワイトボードを配置し、ゼミでの学習、サークルや課外活動の勉強会、研修などグループワークを実施しやすい環境となっています。

コラボレーションエリアは、多目的スペースとなっています。このエリアには、くつろぎながら雑誌や新聞を読めるコラボレーションラ

ウンジ、ゼミや課外活動の発表を行えるKUステージ、エリアの利用案内・予約、機材貸出を担うKUコンシェルジュがいます。また、コモンズの全域には無線LANを構築しており、ノートPC、iPadを貸し出し、ICTを活用した学習を推進しています。

このように、コラボレーションコモンズでは、正課や課外における学生同士の学び合いを促進し、グローバル・ライティングの専門性を持った学生スタッフが学習支援をし、学生の学びを深めることを目指しています。つまり、コモンズで生成する活動には、学生、

学生スタッフ、教員、職員様々な立場にいる関大人が関わりますので、「学生同士のコラボレーション」、「学生スタッフと学生とのコラボレーション」、「学生スタッフ同士のコラボレーション」、「学生、教員、学生スタッフ、職員とのコラボレーション(ひいては社会とのコラボレーション)」といった多層のコラボレーションが生成されることが想定されます。互いに協力し合うことで、相互作用がおこるコモンズへの願いを込めてコラボレーションコモンズと名付けました。

またこのような多層なコラボレーションを促す学習環境の整備を行うため、メイン・キャンパス中央に位置し、大学生協があり、学部を超えた学生、教職員が集う場として成立している「凜風館」1Fのオープンスペース(1012㎡)に開設することにしました。食事をし、生協に立ち寄りといった学生生活のサイクルから最も近い場所を活用することで、そのサイクルの

中にコモンズ利用を組み込むことを目指します。

なお、コラボレーションコモンズのデザインに関する詳細な記述は、「考動力を育む学習環境“コラボレーションコモンズ”のデザイン」関西大学高等教育研究紀要第四号(2013)をご参照ください。

(教育推進部 岩崎千晶)



コラボレーションコモンズ イメージ図

文部科学省「大学間連携共同教育推進事業」に採択

〈考え、表現し、発信する力〉を培うライティング／キャリア支援

文部科学省が重点的に財政支援を行う平成24年度「大学間連携共同教育推進事業」に、関西大学と津田塾大学による連携取組「〈考え、表現し、発信する力〉を培うライティング／キャリア支援」が採択されました。

大学間連携共同教育推進事業とは、複数の

大学が国公立の設置形態を超えて相互に連携し、共同の教育・質保証システムの確立を目指す取組です。今回の事業には、全国の国公立大学等から153件の申請があり、達成目標が明確で高い成果が見込まれる49の取組が選定されました。平成24年度より5年間かけて事業

が展開されます。

取組は関西大学と津田塾大学によって構成される「プロジェクト運営委員会」を主体として運営されますが、関西大学側の運営は、教育開発支援センターの中に設置された組織「ライティング支援プロジェクト」によって担われています。

本取組の趣旨

本取組では、ライティング支援を通して〈考え、表現し、発信する力〉の育成を目指しています。

大学での学びの場を中心に発揮されるライティングの力には、多様な知的能力が分かちがたく統合されています。そこには、資料を検索し読解する力、データを分析し総合する力、自分の見解を論理的に考え、表現する力、それを発表して相手に伝える力、相手とコミュニケーションをとり、相互理解を形成する力など、多様な能力が含まれているのです。そのような総合的な知的能力が〈考え、表現し、発信する力〉です。

この力は、大学で学んでいくために不可欠の力ですが、同時に、社会の中でコミュニケーションを形成し、主体的に考え生きていくために必要不可欠の力でもあります。それはまさに、学生の人生全体において必要なものであり、その育成は、大学におけるキャリア支援の要となるものだと思います。我々は、このような、キャリア支援と分かちがたく結びついたライティング支援を、〈ライティング／キャリア支援〉と呼んでいます。

取組では、このライティング／キャリア支援体制を、両大学が力を合わせて構築していきます。両

大学で展開するライティングセンターの支援体制整備を中心に、eポートフォリオシステムの開発や客観的評価指標など、あらゆる側面から総合的なライティング／キャリア支援体制の充実を図っていく予定です。



取組内容

本取組は、五つの柱からなります。

①ライティングセンターの支援体制の再構築

関西大学のライティングラボと津田塾大学のライティングセンターの支援体制を再構築し、より充実したライティング支援を目指します。具体的には、(1)TAによる指導の質を向上させるために合同研修や指導ガイドラインを充実させる、(2)指導する文章の幅をレポート・論文から、大学で必要な多様な文章に拡大する、(3)書くことへの動機づけにつながる講演会や文章講座を積極的に開催する、(4)ガイドブックを作成する、(5)作文コンテスト

を実施するなどの多様な取組を実施します。

②ライティングに特化したeポートフォリオの開発

ライティングセンターでの指導履歴管理や運営支援、評価指標を用いたセルフチェック、さらには学生の学習記録を社会に向けて公表できるキャリア形成支援のためのポートフォリオ機能を持つ総合的な支援システムを開発し、活用します。

③評価指標の確立

書く力と、そこから広がる〈考え、表現し、発信する力〉の向上を客観的に測るための評価指

標（ルーブリック）を開発し、活用します。また、学生が自己の学びを振り返るための総合的な自己評価指標も同時に開発し、学生の気づきを促します。

④授業カリキュラムとの連携

両大学で開かれている様々な授業と密接に連携し、支援の効果を高めます。

⑤社会連携

高大連携をはじめとして、幅広く社会と連携し、様々な取組を推進し、取組成果を大学だけでなく、社会全体に広げていきます。

ライティングラボとは

ライティングラボとは、関西大学の学生を対象としたライティング支援室（ライティングセンター）であり、関西大学の学生であれば誰でも利用することができます。2010（平成22）年度に開設された文学部の「卒論ラボ」を母体としていますが、2012

年度から「ライティングラボ」と名称変更され、現在は、教育開発支援センター「ライティング支援プロジェクト」によって運営されています。2012年10月には文部科学省大学間連携共同教育推進事業「〈考え、表現し、発信する力〉を培うライティング／

キャリア支援」に採択されました。このGPの取組の一環として、現在、ライティングラボの本格的整備を進めており、ライティング支援体制の一層の充実が期待されています。ライティングラボの支援内容と特徴は、次の通りです。

ライティング支援

ライティングラボは、第1学舎1号館5・6階にあり、ここでレポートや論文などの作成支援をおこなっています。授業期間中は月～金曜日の毎日開室され、一回の指導時間は45分で、予約が必要となります。支援は、TA（大学院生）が学生に質問をし、対話をしながら、具体的な問題点を見出し、アドバイスをするといいかたちでおこなわれます。TAが添削をしたり、答えを与えるのではなく、学生に自分で問題点を考えてもらい、「気づき」を促していくことが重要だと考えるからです。指導内容は、授業でのレポートから卒業論文、ゼミの発表原稿・レジュメに至るまで、ありとあらゆるアカデミック・ライティングの文章であり、作成途中や未作成の段階でも相談を受け付けています。



ライティングラボでのTAによるアドバイスの様子

まなかんウェブ

ライティングラボでは、「まなかんウェブ」というオリジナルのWebアプリケーションを活用しています。まなかんウェブでは、ライティングラボの予約ができるほか、自分の作成したファイルを保存し活用することなどができます。現在、大学間連携共同教育推進事業の取組として、新しいWeb型ポートフォリオシステムの開発を進めており、より進化した支援システムに発展していく予定です。

文章表現ワンポイント講座

ライティングラボでは、「文章表現ワンポイント講座」を開講しています。これは、ライティングにおいて注意すべきポイントを解説する1回30分の授業外講座で、毎学期、授業期間中に開講されています。そのほか、ライティングラボでは、ライティングに関わる様々な講演会やセミナーを不定期に開講しています。

（文学部 中澤 務）



「〈考え、表現し、発信する力〉を培うライティング／キャリア支援」講演会の様子

教育開発支援センターからのお知らせ

学生による授業評価アンケート ～実施率が改善されました～

2012年度における授業評価アンケートは、前年度までに比べて実施率がかなり高くなりました。ここに言う実施率とは〔実施科目数／実施対象科目数〕のことです。過去4期の数値は、2010年春学期に60.5%、同秋学期61.7%、2011年春学期47.6%、秋学期49.0%…というように、概ね40～60%前後を推移していましたが、2012年度に入ってから春学期81.9%、秋学期81.0%というように80%を越えるようになりました。

2000年より試行的に実施されてきた授業

評価アンケートは、2011年春学期に、アンケートタイプや質問項目の変更、科目担当者へのフィードバックシートの作成、紙方式への統一など、大きな改訂をしました。実施率の他にアンケートの回答率（回答者数／履修者数）も高くなってきているので、改訂の効果が現れてきていると考えてよいのかもしれませんが、とはいえ、真の効果は授業評価アンケートの結果を参考に、授業の維持や改善がなされることにあります。作成したフィードバックシートにはそのよ

うな情報が得られるような工夫が施されています。どうぞ、ご活用くださいますよう、お願い申し上げます。なお、教育開発支援センターではactive learningを実現するためにPBL型授業の普及を視野に入れていいます。今後、このタイプの授業科目が増加した場合に新たなフォーマットを検討するつもりでいます。その折には要望やリクエストをお寄せ下さいますよう、重ねてお願い申し上げます。

(教育推進部 三浦真琴)

新シリーズのランチョンセミナー(第一期)が終了しました

前回、ご案内申し上げたランチョンセミナー(教育開発支援センター主催)の新シリーズ『グループワークをはじめませんか?』は平成24年12月7日に第3回、12月21日に第4回、同25年1月11日に第5回(ランチョンセミナーとしての通算は第11回)を開催し、シリーズの第一期を終えました。前号のNewsletterではシリーズの第1回目ならびに第2回目についての報告をいたしましたので、今号では、残る3回についてご紹介いたします。

シリーズ第3回目は平成24年12月7日に『グループワークに向けて“HOP STEP JUMP”』と題して開催しました。この回及び続く第4回には化学生命工学部の片倉啓雄先生を講師としてお招きし、“World Cafe”の手法を、どの学生もがミッションを遂行するように(フリーライダーが発生しないように)アレンジした工夫についてお話し戴きました。このうち、第3回目は「ワールドカフェ開店に向けて」、すなわちグループワークに向けての準備についてご丁寧な説明を頂きました。片倉先生は大学の学部教育で身につけるべき能力は就職活動で必要となる能力につながるものであるから、グループディスカッションに積極的に参加することには大いに意義があると伝えます。そして批判や失敗を怖れたり、回避しようとしたりする傾向にある学生に、失敗しないと考える深まらないことを理解させます。また授業の随所でクリッカー(オーディエンス・レスポンス・システム)を用いたり、学生にとって身近なトピックスを引き合いにだしたりして、学生たちがそれとは気付かないうちに授業に参加する雰囲気を作ります。このような働きかけが実はアイスブレイクの役割を果たしているの、わざわざアイスブレイクと銘打って何か特別なことをする必要はないとのことでした。続く第4回目は同年12月21日に『グループワークに向けて“HOP STEP JUMP”』と題して開催しました。この

回はWorld Cafeのアレンジについてお話し戴きました。一般的なWorld Cafeのスタイルは4名からなるグループでのダイアログ(あるいはディスカッション)を終えた後、3名が隣のグループに移動し(相対的には1名が反対側にある隣のグループに移動するのと同じことなのですが)、移動した者は自分のグループでどのような話題が登場したかなどを隣のグループに伝えます。3名(もしくは1名)のビジターを迎えた隣のグループは自分たちのグループでどのような話し合いがなされたかをビジターに伝えます。そのような伝達作業を終えた後、移動した3名(あるいは1名)は最初のグループに戻り、出先で聞いた情報などをグループメンバーに伝えます。こうすることによってグループは両隣のグループでのダイアログ(あるいはディスカッション)の内容を知ることになり、会場全体の意見を集約するに当たって有益なステップを刻むことになります。片倉先生がご担当のクラスには105名の受講生がいるので、それぞれ7名からなる15のグループを編成します。このうち1名に司会の役割を、他の2名には説明者、さらに他の2名にメッセンジャー、残る2名には発表者としての役割を与えます。2名いる説明者のうち1名は自班の討論内容を来訪者に伝えます。残る1名は来訪者からの情報をその場にはいなかったメッセンジャーに伝えます。メッセンジャー2名のうち1名は訪問先で自班の討論内容を説明し、残る1名は訪問先の班の討論内容を自班で説明します。2名の発表者はメッセンジャーと説明者から得られた情報を必要に応じて取り込みながら自班の討論内容を翌週の授業時に発表します。このようにメンバー全員にミッションが課せられているので、それぞれのミッションに応じた役割を遂行すべく、どの学生も考えて行動するようになるのが、片倉流World Cafeの重要にして有意義なポイントです。

年明けの1月11日には『グループワークの

NEXT STAGEへ』と題して、このシリーズ第5回目のセミナーを開催しました。この回には商学部の長谷川伸先生を講師にお迎えし、「計算問題でもグループワークが効果的!」というテーマのもと、1年次向け専門教育科目の授業で実践されているグループワークをご紹介いただきました。セミナーでは需要供給曲線に関する計算問題を例に出して、通常の授業ならパーソナルワークのみを展開して進んでいくところを、ここにグループワークを介在させることで、学生の理解を助けたり、深めたりすることができるのお話でした。計算問題を苦手とする学生にとっては、その問題を理解している学生からのアドバイスやサポートを受けることにより、その理解が助けられることになります。教師よりも身近な学生に説明してもらう方が苦手の原因やつまづく箇所気付きやすく、あるいはそれを質問しやすいので、このようなグループワークはかなり効果的です。また、既に課題を理解している学生も他者に説明することを通して、さらに理解を深めることができます。このようにグループワークは、いずれの学生にとっても教育効果があると考えられます。グループワークを展開するに当たり、提示された問題へのアプローチや解答までのプロセスなどを勘案して、良問を用意しなければならぬと考えがちですが、長谷川先生が提示されたように、シンプルな計算問題でも十分にグループワークを活用し、教育効果を上げることができることを銘記したいと思います。

なお、ランチョンセミナーの様子は以下のWebページでご覧いただけます。

<http://www.kansai-u.ac.jp/ctl/outline/ict01.html>

また、今後も同種同様のセミナーを開催していきます。ご要望、リクエストなどございましたら、教育開発支援センターまでお寄せ下さいますよう、お願い申し上げます。

(教育推進部 三浦真琴)

「学生の教育力活用」が全学展開に!

教育開発支援センター長 田中 俊也

大学における学部学生・大学院生（以下単に「学生」とする）は、それぞれの学びを求めて大学に来ています。大学教員は教を提供し、大学職員はその教え・学びの環境作りに精励するといった形で、従来、大学の構成員はその役割を明確に分化しているようにみなされてきました。

ところが実際には、学生は単に教育を受ける役割を担うだけでなく、教育をする側に立ちうる潜在的な力を秘めています。高校までと違って、異なる年齢が混在する大学の授業においては、少し先をいく者が初学者を、上位学年が下位学年を、院生が学部生をサポートできる可能性が十分にあります。また、授業に入って直接教育のサポートをするわけではありませんが、前後の授業準備・片づけ等の手伝いで間接的なサポートをする形もあります。

教育開発支援センターではこれらを「学生の教育力活用」という形で精査し、平成25年度より全学的に展開させることになりました。その内容は以下の通りです。

まず、学生の教育力を、授業の前後の準備・片づけといった比較的事務的な業務と、授業に入って教員の指導のもとで他の学生の学習援助・補助をする業務に2分します。前者は「授業支援SA（ステューデント・アシスタント）」という名称で、既に数年前から制度化されて動いていました。各学舎の授業支援ステーションに、希望する学生の中から選ばれた学生たちが交代で常駐し、先生方の授業の周回的な補助を行っています。

この度は、この授業支援SAに加えて、授業に直接入って他の学生の学びを補助する役割を担う制度を全学的に展開する事になりました。具体的には、TA（ティーチング・アシスタント）と、LA（ラーニング・アシスタント）制度の創設です。学内には既に、今回計画したTAや

LAと同等の制度を学部・研究科独自の方針で動かしていた部署もあり、今回の制度はそれらには適用せず従来通りの運用を尊重し、新たな、全学的制度として位置付けることとしました。

TAは、主に大学院生が担い、教員の指導のもと、その授業の教育内容に踏み込んだサポートを他の学生に対して行います。これまで長く「試行的TA制度」という形で教育開発支援センターが比較的小規模に運用してきたものを、その効果検証を踏まえて、全学的に規模を広げて発展させたものです。TAは、将来大学の教員になる可能性も秘めた大学院生が担うという意味で、その院生への教育という意味合いも強く含まれています。

一方、LAは、主に初年次教育等、高校までの「学習」スタンスと大学に入ってからの「学び」のスタンスのずれをできるだけ早期に解消すべく学び方を学ぶことに特化された授業の補助をする者です。そうした授業で既に学んだ経験のある学生が、初学者の学び方をサポートします。したがってここでは、授業での各論の深化のサポートを期待するものではありません。例えば初年次教育の授業で、ディスカッションの方法の習得を目標に、題材として「わが国のエネルギー政策」を扱った場合、エネルギー政策という内容に踏み込んだサポートではなく、ディスカッションの方法を教えるファシリテーターやモデルの役割を担います。

TAやLA、授業支援SAを全学的な制度として展開することによって、教え手、学び手、環境整備者という教育の全体像を学生自身が把握できる意味は大きなものがあります。スタートしたばかりの全学制度、不備なところは修正しつつ、関西大学の大きな誇りとして育てていくことにご協力いただきますよう、お願い申し上げます。

From CTL事務局

年度末を間近に迎えるにあたり、今年度のCTLの取り組みと成果を振り返ってみたいと思います。2008年10月のCTL開設以来、もっとも目まぐるしく、様々な取り組みが展開された1年だと感じています。

文学部が卒業論文を中心に取り組んでいたライティング指導のGPを継承し、全学展開するために「ライティング支援プロジェクト」を立ち上げました。その後、津田塾大学と大学間連携共同教育推進事業に『〈考え、表現し、発信する力〉を培うライティング／キャリア支援』の取組名称で申請し、採択されました。津田塾大学との連携にはTV会議システムを活用しますが、時には

津田塾大学を訪問し、Face to Faceの対話をもって運営を進めています。

TAやLAという学生の教育力を活用し、学生が主体的に学び、教育の質保証を目指した授業改善を推進するために、「TSネットワークプロジェクト」と「全学TA制度制定ワーキンググループ」を発展的に改組し、「学生の教育力活用プロジェクト」に再編成しました。これまで試行的に実施してきたTAやLAを活用した授業の実施結果を分析・検証し、TAやLAに関する規程と活用ガイドラインを制定しました。今後も分析・検証を繰り返し、より良い制度となるよう目指しています。

私立大学活性化設備整備事業に『「考動力」を育む学習環境「コラボレーション

コモンズ」の構築』の取組名称で申請し、採択されました。授業時間外学習、学生の主体的な学び、他者との共同学習を可能とした場を、凜風館1階の学生ラウンジに整備し、グループ討議等で自由に使えるパソコンやホワイトボード等の貸出サービスも行います。

紙面の関係で今回ここに記せなかった多くの取り組みや成果も、大学の授業改善というキーワードの基に有機的に結び付いています。これらの取り組みの実質化に向けて、より多くの先生方に賛同・参画していただけるよう、草の根運動的な地道な活動も大切にし、CTLの存在感が高まることを期待しています。

(恒)